

◆ 新宿都税事務所長賞 ◆

「誰かのために、自分のために」

新宿区立新宿中学校 3年 中原 友

二千二十三年も終わりが近づこうとしている、中学二年生の十二月のこと。

「今年の漢字は、税です。」

私が考えもしなかった漢字が選ばれたことをニュースで知った。増税と減税、インボイス制度の施行など、税を巡って世論が混乱したことを表しているようだ。

「それではこの漢字について、街の人にインタビューをしてみましょう。」

「ただでさえ生活が苦しいのに、税金の負担が増えて困っています。」

「自営業の私は、インボイス制度の対応に追われて大変でした。」

ほとんどの人が、税金の負担を訴えていた。街頭インタビューを見て、「こんなに人々に負担を強いる税金は、本当に私たちの暮らしに役立っているのだろうか」とモヤモヤした気持ちが残った。

年が明け、四月になって新学期が始まり、私は中学三年生になった。

朝、綺麗に舗装された道路を歩いて学校へ向かう。車道にはパトカーや救急車が走っていて、私たちの安心・安全な暮らしを今日も守ってくれている。学校に着くと、机上に教科書、ノートを置き授業の準備をする。お腹がすいた頃に美味しい給食が提供される。それらは、私にとっての当たり前の日常だ。

その当たり前の日常が税金によって支えられていることを、この作文を書かなければ知ることも、知ろうとしなかったと思う。財務省のデータによると、生活に必要な道路を整備するために、一人当たり約十四・七万円が、犯罪や事故から守るために、一人当たり約二・七万円が、公立中学校で勉強するために、生徒一人当たり約百十四万円が、税金によって賄われているという。

税金は何に使われているのだろう、何のためにお金を払うのだろう。自分には程遠い存在だと思っていた。しかし、私の生活の土台が税金によって支えられていると分かった時、税金に対する見方が変わったとともに、税金にどこか不信感を覚えていた自分を恥ずかしく思った。

税金についての話を聞く時、大抵はデメリットが強調され、メリット、感謝の声を聞くことはあまりない。しかし、自分の目の前の生活が何によって支えられているのかを考えた時に「税金」はかせないものだと思えて気が付く。自分の納めた税金が誰かの生活の土台となり、そして、自分の生活の土台となっているのだ。

今、自分が負担している身近な税金は消費税の他にないが、私も数年後には所得税、住民税など様々な種類の税金を納める立場となる。「誰かの役に立つことができる」ということを誇りに思い、責任を持って、税金を納めたいと思う。